

## 着飾った花嫁

11月14日、芦屋教会オープニング記念日のことです。詩篇の聖研があったのですが、聖研が始まる前、今日皆で歌うさんびの練習をしていました。「わたしは山に向かって」という大曲です。

ちょうど私が座っている椅子のすぐそばにいる一人の働き人が目に入りました。その働き人は静かにうつむいて床に座っていましたが、私は何か気になりました。痛んでいるなと感ずるのです。自分の痛みと悲しみを必死に見まいとしているようだったからです。

その時、ふと語りかけられる「声」を聞きました(と感ずました)。

わたしの花嫁はどこか

まるでこれはなぞかけです。しかし私は主がこの痛んでいる働き人のことを言っておられるのだと思いました。どこにいるかと言われてもこの働き人は私の目の前にいます。

しかし内なるキリストの花嫁は見あたらない。何があったのか。痛みによって最も大切なものが見失われているということではないかと思いました。

この者の内にはいるはずの「わたしの花嫁」はどこにいるのか(しかしこの問いかけは、もはや花嫁がいなくなったというのではなく、あくまでも「どこにいるか」なのです。花嫁はまちがいなくいると信じている方の言葉です)。

主を信じる者、主のために働きたいと願っている者が痛んだり悲しんだりしているのを主は放っておかれぬのでしょうか。あなたの、そして私の内にある「キリストの花嫁」とは、主のよろこびではないかと思ひます。

ところで、主の妻と言われると、労苦を共にする、あるいは一人で夫のために苦しみを負おうとする姿を思い浮かべますが、花嫁というと、ういういしいよろこび、大好きな人のお嫁さんになれる幸せだけが浮かびます。

キリストの花嫁とされるとは永遠に花嫁とされつづけることです。かしい妻にならなくてもよい。よい妻になるための努力はいらない。ういういしいよろこびだけでよい。キリストの願いに生きる花嫁。そのままを愛され美しさが守られ、よろこびが守られるというのが私のイメージする花嫁の姿です。

ちょっと話はそれますが、花嫁と妻などということを書いたからでしょうか、かつて好きだった一人の指揮者の言葉を思い出しました。フルトヴェングラーという指揮者です。私の学生時代にはもう亡くなっていましたから、かなり昔の人です。

たぶん、フルトヴェングラーがベルリンフィルの常任指揮者であった頃のことだと思ひます。彼は言ったそうです。「ベルリンフィルは私の妻で、ウィーンフィルは私の恋人だ」

ベルリンフィルはフルトヴェングラーによって美しい深いつややかな音を出してました。他のどの指揮者によってもこんなに美しい音は出していませんでした。一方ウィーンフィルは愛らしい繊細な音を引き出されてました。これも又、他のどの指揮者にも出せない美しさでした。私にとってこれは、指揮者によって演奏がこうも違うのかと目が開かれるきっかけとなりました。

妻か恋人か。私はこの二つを分けるのではなく、二つが同時でそれ以上の関わりが必ずあるはずだと考えました。それを見つけたかった。しかし現実には難しく、小説の中でも私の理想とする関わりはなく、せいぜい、ある時は妻、ある時は恋人というのがあるくらい

で、二つが同時で、しかもそれ以上のものというのは無理なんだとあきらめました。

しかし今、「キリストの花嫁」というのが、この同時でそれ以上のものというのではないかと思ひました。はじめの愛です。キリストの愛に答があるのでしょうか。

さて、「わたしの花嫁はどこか」という問いは主が失われた者を探そうと、いや帰って来るのを待っておられる言葉だと思ひます。「私はここにいます」という花嫁の声を主は待っておられるのでしょうか。

「わたしの花嫁はどこか」の声に私は驚き、とまどい、そしてあらためて主の愛を感ずいた時です。静かに迫る「声」がありました。

わたしの花嫁はどこか ともう探すことはない  
地はわたしの着飾った花嫁を見るであろう  
新しい時が始まる

再びなぞのような言葉です。最初の「わたしの花嫁はどこかともう探すことはない」とは、主がもうわたしの花嫁はどこかと問われる必要がない時が来る。ほんものの花嫁が地上に姿を現すから、ということでしょう。黙示録21章の言葉が浮かんで来ます。

わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。(黙示録 21:1-2)

「着飾った花嫁」という言葉が迫ります。美しい風の教会の完成予想図を思い浮かべてしまうからでしょうか。新しいエルサレムとは風の教会のことかもしれない。あるいは風の教会を通して成されることなのかもしれないと思ひました。

つい先日、11月の「平和の祈りとさんび」の初日、私は内に迫る「声」を聞きました。

風の教会が一人一人の内に建つ時が来た  
風の教会はあなた方の至聖所なのである

ある建設業社に風の教会堂建設をなんとか引き受けてもらいたいとひたすら祈っている時でした。ピーター先生が「山よ動け！」と祈られたとたん、私は「山は動いた」という声を聞きました。だからもう大丈夫と思ひていました。確かに山は動いたと信ずることができました。ところがまるでクギを刺すように一つの言葉が続きました。

怒りは建つことを妨げる

思わず私は「誰も風の教会に対して怒ってはいません」と答えてしまいました。風の教会への怒りや反対が教会を建てないのではなく、一人一人の内にある怒り、まわりの人への怒りや自分自身への怒りさえ - 主の前にさらされていない怒り - は教会を建てないということなのでしょう。人はみな一つの「からだ」にあるのですから。主のからだ成る時が来た。

風の教会が建つと、もう花嫁はどこかと探さなくてもよくなる。一人一人の内に風の教会が建ち、そこに花嫁と花婿はいつも共にあり、よろこびが満ち続けるからです。